


<スライド1>



**職業奉仕は I Serve**

**国際ロータリー D2750 PDG 新藤信之**

2014年10月15日  
於：釧路北ロータリークラブ

- 本日は「職業奉仕とは」という深遠なテーマをいただきました。
- このテーマをいただき、職業奉仕の何をどのように話しをすれば良いのか、正直迷いました。目の見えない私が、象を語るような、浅学非才な私が職業奉仕を語ることにならないか。これまで全国から著名な方を招いて、6回目になる会とお聞きしておりましたので「職業奉仕とは」については、語り尽くされた、というか聴き尽くされたと言ってもよい状態にあるのではと思いました。考えた挙句、結局、大上段に構えて直接に「職業奉仕とは」と、特に、職業奉仕の理念や実践について真正面から取り上げて、抽象的な話をすることは避けることにしました。
- 従って、本日の卓話は、100年を超えるロータリーの歴史の中で、ロータリーの奉仕、特に「職業奉仕」との関係で「奉仕の実践主体の変化」に焦点を当て、今「職業奉仕を取り巻く問題」は何か、ということができる限り具体的に語ることにさせていただきました。
- さて、今「職業奉仕を取り巻く問題」は何か、といえば、ロータリーの奉仕の世界で、職業奉仕の世界が徐々に狭められ、社会奉仕、国際奉仕に関係した人道的奉仕活動が強調されることによって、職業奉仕が軽視されているという問題です。
- 私は、このような状況となった主な原因は、基本的に、ロータリーの奉仕の実践主体が変わってきたことに依るのではないかと考えております。
- ロータリー初期の頃は、奉仕の中心は、今で言う「職業奉仕」であったということ、そして奉仕の在り方は「I serve」が基本であり、奉仕の実践主体は「I」で、ロータリアン一人ひとりであったと考えております。それが戦後、ロータリー財団プログラム、世界社会奉仕プログラムそして青少年プログラムが次々と登場することにより、人道的奉仕活動が脚光を浴び、IからWeに変わり、更に、3Hプログラムを契機にポリオ撲滅プログラムが国際ロータリーの主要なプログラムになることにより、そのWeそのものも変化してきたこと、具体的には、奉仕の実践主体がロータリアンからクラブへ、そしてクラブから国際ロータリーへと変わってきたことです。そして更には、国際ロータリーという組織の基本的要素の一つである正会員そのものが変わってしまったこと、これこそが実践主体の歴史的变化であり、今では職業人でない人まで正会員になれるようになってしまいました。
- これによって、今、職業奉仕が軽視されているということが、目に見える、具体的な問題として、我々の前に提起されているということです。このことを頭の片隅に置かれて本日の卓話をお聞きいただければ光栄です。

## 国際ロータリーの変質

### 国際ロータリー組織の基本3要素

1. **会員の再編成** (採択制定案01-148)
  - \* **正会員の拡大**
  - 1)退職者(2001年COL) 2)地域社会のリーダー・R財団の学友(2007年COL)
  - 3)仕事をしたことのない人または仕事を中断した人(2013年COL)
2. **クラブの再編成** (採択制定案01-186)
  - \* **クラブの多様化**
  - 1)Eクラブ(2010年COL) 2)衛星クラブ(2013年CLO)
3. **地区・ゾーンの再編成** (採択制定案01-215)
  - \* **クラブの区域限界の撤廃 ⇒地区の境界の変更**
  - 1)地区の合併 2)地区の分割(RI理事会決定による)

●ところで、国際ロータリーは、歴史と共に成長し、変化してきた組織です。特に、21世紀に入り「大転換期」と言っているほど、明らかに組織の本質的な部分が変わってきました。

●このことについては、本日配布させていただきました小冊子「国際ロータリーの変質」に書かせていただきました。

●それを要約しますと、その本質的な変化とは、2001年規定審議会で、RI理事会から提案された3つの制定案が採択されたことがきっかけで、この10年余りの間に、国際ロータリー組織の基本的な要素である「会員」「クラブ」そして「地区/ゾーン」という3つの要素が変化してきたということです。これも、半世紀以上に及ぶ急激な会員増加およびクラブ拡大とによって、世界的な規模での組織再編成が必要であったからです。

それが、地区・リーダーシッププラン、クラブ・リーダーシッププラン、ストラテジックプランという国際ロータリーの一連の戦略によって、世界的規模の組織再編成が、ここにきてほぼ終了し、国際ロータリーは新たな重大な局面を迎えているという内容です。

具体的内容については、小冊子をご参照下さい。ただこのうち「会員の再編成」は、奉仕の実践主体、特に「職業奉仕の実践主体」との関係があります。本日の卓話の核心に触れることでもありますので、後にお話し致します。

## I serve ; We serve

### 奉仕(SERVICE)をめぐる問題

- 1) 1906年4月、D. Carter の入会で対社会的活動を取り入れる  
**親睦・互惠派 と 奉仕・拡大派の対立**  
⇒ **全米ロータリー・クラブ連合会(1910年11月)**
- 2) 1912年頃～1923年6月、奉仕の実践をめぐる対立(身体障害児問題を契機)  
**「奉仕の心の育成」:理論派 と**  
**「奉仕活動の実践」:実践派の対立**  
⇒ **「決議23-34」(1923年6月セントルイス国際大会)**

<出発点としての歴史的文献>  
1923年:決議23-34 と 1927年:目標設定計画

●さて、私は1981年9月に東京立川ロータリー・クラブに入会しました。今から33年前です。新会員研修・歓迎会の席上、強烈に記憶に残っていることは「ロータリーとライオンズの違いは、何だか知っていますか」という質問です。その答えが「ロータリーは I serve ; ライオンズは We serve」とのことでした。

このサービスの実践主体が個人であるのか、団体であるのかは、確かに単純に割り切れることではありませんが、このことを明確にすることで、「ロータリーとは何であるか」を考える手掛かりになり、ロータリーの職業奉仕が、他の奉仕団体と区別するロータリーの特徴であることを、後に知ることになりました。

●今のロータリーの職業奉仕 (Vocational Service) は、1927年のベルギーのオステンド大会でR I B I (R I in Great Britain and Ireland の略) から提出された目標設定計画 (The Aims and Objects Plan) の承認によって奉仕部門の一つとして確立されたということは、既に皆さんお解りのことと思います。また、ロータリーの誕生から、この1927年までのことについても、私がお話するまでもなくこれまで幾度となく諸先輩からお聞きになっていることと思います。

●ただ、ロータリーの初期のこの頃の記録や文献はほとんどなく、ポールハリスの「ロータリーの理想と友愛」にしても、シカゴクラブ史である「Gold Strand」(1966年オーレンアーノルド編纂) にしても過去の記憶を辿って書かれたり、伝聞により書かれたもので、曖昧なところが多く、誤った記述も多く散見されます。例えば、シカゴクラブが行った公衆便所設置運動は、Gold Strand ではポールハリスの発案だとされていますが、フレリック・トゥイドとドナルド・カーターの発案であったことが、後に一時資料として源流の会アーカイブの「歴史資料」の中に収録されています。

この頃のこととして、ロータリーが、理念と組織を確立するには、誕生から約20年近くの歳月が必要であったことは推測できますが、歴史的記録や文献に基づいて奉仕の理念、特に、職業奉仕の理念がどのように形成されたかについては、公式な記録や文献は残されておりません。

●ただ、奉仕の理念、特に職業奉仕の理念の形成に関し、その肝心と思われる部分は、最小限、皆さんと認識を共有するという意味で、次の点を、まず確認しておきたいと思います。

奉仕(Service)の理念が確立するには、スライドにあるように、Service のあり方をめぐって、ロータリー内部で2回の対立が生じ、最初の対立を契機に、全米ロータリークラブ連合会、1912年に国際ロータリークラブ連合会が設立され、この頃、図書の訪問販売という実践を通じて考えだしたというアーサー・F・シェルドンの提唱した「He profits most who serves best」を、一般的な Service 理念としてロータリーが取り入れたこと。そしてその後1915年サンフランシスコ大会で採択された「職業人のためのロータリー道徳律」と翌年のガイ・ガンディカーの「ロータリー通解 The Knowledge of Rotary」の発刊によって、職業倫理の高揚を前提とした一般奉仕理念がロータリーに定着していき、更に、身体障害者問題を契機に、奉仕の実践を巡る2回目の対立の中から、最終的に1923年セントルイス大会で「決議23-34」が採択されたということ。以上の点を、初期ロータリーの奉仕 (Service) 理念の形成過程の重要な要素として、皆さんと確認しておきます。

●1922年ロサンゼルス国際大会で、国際ロータリークラブ連合会は「国際ロータリー」と改称され、全ての新しく設立されるクラブに、標準ロータリークラブ定款が義務つけられ、ロータリーは世界的な組織として確立します。そして1923年セントルイス国際大会で「決議23-34」が採択されます。

私は、歴史的文献として現存する「決議23-34」と1927年オステンド国際大会で採用採択された「目標設定計画 Aims and Objects Plan」に基づき、その草創期においては、ロータリーでいう奉仕の中心は「職業奉仕」であったということ、そして奉仕は「I serve」が基本であったということ、をお話ししたいと思います。

## 決議23-34 第1項

### <ロータリーは人生哲学>

1) ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務及びこれに伴う他人のために奉仕したいという感情の間に常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕 — 「超私の奉仕」の哲学であり、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践的な倫理原則に基づくものである。

ロータリーには二つの奉仕理念があり、その一つは「超私の奉仕」という人道的奉仕活動の理念であり、もう一つは「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という職業奉仕の理念である。

●当初の1923年の決議は「綱領に基づく諸活動に関するロータリーの方針」という表題でした。

このスライドにある第一項は、言うまでもなく、皆さんのクラブが1910年の規定審議会に決議案(10-182)として提出され、圧倒的多数(444対66)で「奉仕の哲学の定義として使用する」ことが認められたものです。

従って、決議23-34についての解説、特にこの第一項の解説はお釈迦さまに説法となります。

●ただ、今一つはっきりしないことは、スライド赤字の部分の「超私の奉仕」と「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」との二つの関係です。この関係を『「超私の奉仕」の実践が原因となって「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という結果をもたらす』という因果論として語られることがあります。私は単純に『ロータリーには二つの奉仕理念があり、その一つは「超私の奉仕」という人道的奉仕活動の理念であり、もう一つは最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という職業奉仕の理念である』と言った方が簡明で理解し易いと思っています。

●実は、今申し上げた文章は、田中毅PDGが、決議23-34の基本精神を生かして「四大奉仕に基づく諸活動に関するロータリーの方針」という表題で書かれた、第一項の提案文です。

最近のRI理事会は「社会奉仕に関する1923年の声明」を「時代に対応したものに改正すべきである」という見解ですが、そうした動静に対応して、2009年1月 炉辺談話に書かれたものです。

●現状、二つのモットーが序列化されていること、職業奉仕が軽視され、ロータリー財団との関係で人道的奉仕活動が強調されていること、これらを考える時、ロータリーの奉仕の原点は職業奉仕であったこと。職業奉仕の理念によって、ロータリーには人道的奉仕活動の他に、他の奉仕団体と異なる職業人としての特異な実践活動が存在すること。この二つを明確にするためにも、田中PDGが提唱しているこの文章の方が簡明で理解し易いと思っています。

**決議23-34 第6項**  
**<クラブの綱領に基づく諸活動に関する指針>**

- 個々のロータリークラブの諸活動は
- (a) 広範囲な奉仕活動は他に適当な団体がない場合にのみに限る
  - (b) 立派な事業でも、クラブが責任を持てる範囲で実施する
  - (c) 奉仕活動を選ぶ際、その宣伝を主な目的としてはならない
  - (d) 他機関との奉仕の重複は避ける
  - (e) 現存機関への協力と活用が望ましい
  - (f) 他団体の協力を得るように努力し、協力者の手柄とする
  - (g) クラブがひと固まりで行う奉仕より、広く個々の力を動員する方がロータリー精神にかなっている
- クラブの奉仕活動は会員に奉仕の訓練を施す研究室の実験としてのみ考えるべきであるからである (as laboratory experiments)**

●さて、決議23-34の第6項には、個々のロータリークラブの諸活動は、一定の制限、条件下で認められるということが書かれております。つまり、1923年のこの時点で、ロータリーの奉仕活動の原則は、ロータリアン一人ひとりの奉仕活動であって、何人かが集まり、あるいはクラブとして活動をする場合は、スライドにあるような8つのことを指針として活動すべきとされていたと考えます。特に最後の「クラブがひと固まりとなって行動するだけでたるとような事業よりも、広くすべてのロータリアンの個々の力(the individual efforts)を動員するものの方がロータリー精神によりかなっているといえる。それは、ロータリークラブでの綱領に基づく諸活動は、ロータリークラブの会員に奉仕の訓練を施すために考えられた、いわば研究室の実験としてのみこれを見るべきであるからである」という文言は、クラブとロータリアンの関係の本質を表現したもの、つまり、ロータリーの奉仕活動はロータリアン一人ひとりが実践主体で、クラブはそのサポートをする存在であることを表現したものと重要と考えます。

●余談になりますが、正にこの部分が特に現在の状況に合わないと言って、RI理事会が変えようとしているところです。因みに、田中PDGもこの6項と、4項の一部を今の状況に相応しいものに変えるべきであると提案しています。その是非は別として、この第6項について、田中毅PDGは「決議23-34 その存続と危機」(orロータリーの源流：ロータリー情報・奉仕理念の「決議23-34の徹底的解析」論文)という講演で、「ロータリーの団体奉仕活動は、単に団体として群れて奉仕活動をするのではなく、明確な目的意識を持った個人が集まり、団体として奉仕する、即ち individual Collectively Service であることが必要である」と述べています。

示唆に富んだ言葉で、あくまでロータリーの奉仕活動は個人活動が基本で、条件のついた団体活動(Collectively Service Activity)は、草の根の個人奉仕活動を前提とした団体としての奉仕活動であり、上意下達で行うような団体としての奉仕活動ではないということだと思います。

最近、クラブの委員会や理事会が、RI戦略計画に従って、クラブの奉仕活動を決定し、会員に参加を奨励することをよく見かけますが、自発的な会員のよる奉仕活動の提案から始まるロータリーの奉仕活動が基本であるべきであるという意味で、最近の奉仕活動の進め方に危惧を感じます。

**Business Methods Committee の責務**  
＜1923年推奨ロータリークラブ細則第8条第8節＞

・事業方法委員会

クラブ会員が、そのあらゆる職業関係において、ロータリーの倫理訓を実践するというロータリアンとしての責務を遂行できるよう、そしてロータリーの職業倫理と奉仕の理念を各自の事業及び専門職務に反映できるよう指導し、援助すること。(新藤訳)

・Business Methods Committee

This committee shall guide and assist the members of this club in discharging their responsibility as Rotarians to put Rotary's Code of Ethics into practice in all their business relations and to carry Rotary's Ideals of business morality and service into their respective lines of business and professions.

●1927年オスチンド国際大会で目標設定計画の採択に伴い、職業奉仕 (Vocational Service) という言葉が国際ロータリーで使われるようになりますが、それ以前、ロータリーに四大奉仕部門という概念がなかった時には、ロータリーのこの分野として「Business Methods 事業方法」という言葉が使われていました。そしてこれを担当する委員会が、Business Methods Committee 事業方法委員会でした。例えば、1923年の推奨ロータリークラブ細則第8条によれば、この Business Methods Committee の責務は「クラブ会員が、そのあらゆる職業関係において、ロータリーの倫理訓を実践するというロータリアンとしての責務を遂行できるよう、そしてロータリーの職業倫理と奉仕の理念を事業及び専門職務に反映できるよう指導し、援助すること」でした。

因みに、他には Membership、Program、Fellowship、Public affairs、Rotary education、Boy's work、Publicity 委員会がありました。勿論、クラブ奉仕委員会、社会奉仕〃〃、国際奉仕〃〃 もありませんでした。

**目標設定計画との関連で**

**ロータリーの目的(The Objects of Rotary)**  
＜1922年ロスアンゼルス大会＞

下記の事柄を奨励、育成すること:

1. 有益な事業の基礎としての奉仕の理想
2. 事業及び専門職務の高度の道徳的水準
3. すべてのロータリアンの個人生活、事業生活、社会生活において奉仕の理想の適用
4. 奉仕の機会として知り合いを広めること
5. 全ての有用な職業の価値の認識及び全てのロータリアンは夫々の職業を社会に奉仕する機会として品位を高めること
6. 奉仕の理想に結ばれた、事業と専門職務に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和の推進

(「The Aims and Objects Plan」<sup>3)</sup> 翻訳 東昭二 上郡RC)

●また、当時のロータリーの目的は、スライドにある1922年ロスアンゼルス大会で決議された6項目から成るものでした。

ご存じのように、後に1935年メキシコ・シティ大会で、現在のものとほぼ同じ4項目のものとして変更されたまでのこのロータリーの目的が10年以上定着してきました。(1951年アトランティック・シティ大会で Objects of Rotary が Object と単数になる)

●私が源流の会のアーカイブの歴史資料から入手した「目標設定計画」は、2年後の1931年5月改定版のパンフレットです。恐らくこのパンフレットは、クラブリーダーシッププランが2004年の理事会で決定された後に出されたパンフレットのようなもので、その内容を詳しく説明している文書であると想定します。この目標設定計画は、委員会構成を規定してあったり、四大奉仕を詳細に解説したりしており、CLPのパンフレット構成に類似しています。

●100周年を記念し国際ロータリーが出版した「奉仕の一世紀」には、1927年当時、奉仕部門が考えだされた理由として『ロータリーが成長するにつれて、その習慣も複雑性を増し、国際ロータリーが「ロータリーとは何か?」という質問に簡単明瞭な答えをすることが難しくなった』からと書かれています。つまり、この目標設定計画の目的は、「個々の会員に対し、ロータリーの理解を助け、日常生活での奉仕の理念の適用を奨励し、且つ活動プログラムとの調和を図ること」であったようです。そして、このスライドにある「六つの目的が活動プログラムです」とパンフレットに書かれています。

●更に興味深いことは、このスライドにある「六つのロータリーの目的はすべて職業奉仕に深く関わり合っている」ので、職業奉仕がロータリーのプログラムの主要部分であります」とまで言及しております。この六つの目的の解釈として、今の我々の解釈と異なる興味深い解釈が書かれていますので、紹介の意味でも、そのまま読ませていただきます。

スライドの1、2、5項は、現在の「ロータリーの目的」第2項に集約されている職業奉仕そのものなので割愛いたします。

第四項の「奉仕の機会として知り合いを広めること」については、次のように書かれています。

「主として職業奉仕を通じて実践しなければなりません。奉仕の機会として知り合いを広める機会の最大の回数は、各自の職業を通じて発生するからです」と。

そして第三項の「全てのロータリアンの個人生活・云々」については、

「少なくとも三分の一は職業奉仕に言及していますが、実際にはこれよりはるかに高い比率でしょう。というのは彼の事業とか専門職務に、より多くの時間を割いている以上、彼の接触相手、機会は個人生活及び社会生活よりもはるかに多く事業生活で発生するからです」と。

更に第六項の「奉仕の理想に結ばれた・云々」については、

「これは明らかに職業奉仕の最終目標です。戦争は経済的な誤解と紛争から生じました。相互理解、親善、事業上の信用の確立は国際平和に貢献することでしょう」と。

少々こじつけの部分もありますが、当時のロータリーの目的の六つの事項で表現されている活動プログラムは全て職業奉仕に関係しているというのです。

この目標設定計画のパンフレットの中には、今でも新鮮で、驚かされることがいくつも書かれています。

●以上の決議23-34と目標設定計画の二つの歴史的文献から、少なくとも1923年から第二次世界大戦終了までは、ロータリーの奉仕活動は個人による奉仕が原則であり、団体としての奉仕活動は一定の条件のもとに限定的に行うべきであり、職業奉仕に関する奉仕活動が主要な部分を占めていた、と推測できます。この辺りのことは、充分検証できていないと思いますので、あくまでも、現時点で「仮説」とさせていただきます。

「職業奉仕は I serve」が正にこの時代、奉仕の理念を実践する形であり、内容でした。この姿がだんだん薄れて行くのが、第二次世界大戦後の国際ロータリーの姿です。

## 世界社会奉仕理念の登場

<WCSの歴史的背景> 団体による奉仕の芽生え

### 2. 奉仕(SERVICE)の主体・方法をめぐる問題

第二次世界大戦終了後、国際政治に中の東西両陣営のイデオロギー対決が徐々に後退し、平和共存の自覚と共に、いわゆる「南北問題」が意識され始めた。つまり地球上に存在する富の偏在化から来る社会問題が顕在化し、人権侵害や、環境破壊等を国際レベルで解決することが急務となった。国際ロータリーは UNESCO、UNICEF、WHO等々の国連機関と協力し、独自で多様なプログラムの提唱を行うこととなった。

- 1958年 ダラス国際大会で、国際奉仕のアプローチ「Into Their Shoes」会議が始まり、異なる国々を代表する地域社会グループを結成、国際問題について討論。
- 1962年 ニッティンC.ラリー会長の時、「発展途上国を援助するための小企業クリニック(Small Business Clinics)プロジェクトを5カ国で開始。
- 1963年 カールP.ミラー会長の時、「主要な国際奉仕活動である、組み合わせ地区・クラブ・プログラム (Matched District and Club Program)を開始。
- 1966年 リチャードL.エバンス会長の時、世界社会奉仕プログラムを通じ、国際奉仕を支援するようクラブに奨励する。

●この「個人による奉仕が原則である」という考え方に変化が生じます。世界社会奉仕理念の登場です。

所謂「南北問題」を契機に地区／クラブによる奉仕、つまり団体による奉仕の考え方が芽生えます。

第二次世界大戦後の東西陣営のイデオロギー対立が徐々に収束し始めたころの1950年代から60年代にかけて、南北問題が世界の人々の意識に芽生えます。富の偏在による格差によって、貧困、疾病を始め、非識字による社会的差別等、社会問題が顕在化します。

人権侵害や環境破壊等を国際レベルで解決する必要が生じました。もはや、ロータリアン個人の奉仕を中心とした活動には限界があり、これをカバーできなくなりました。

●ロータリーでは、海外の地区／クラブにから要請を受けて、援助地区／クラブの国際奉仕活動つまり世界社会奉仕活動が展開されます。例えば、

1962-63年度、東洋人初のRI会長であるインドのラハリーRI会長は「世界は一つ、世界のどこかに不幸な者があっては、我々は幸福になれない」と言って、発展途上国を援助するための小企業クリニック Small Business Clinics プロジェクトを開始しました。

更に1963-64年度カール・ミラーRI会長は、「組み合わせ地区／クラブ Matched District and Club プログラムを開始し、1966-67年度エバンスRI会長は「世界に一人の餓えた者、一人の文盲者がいる限り、それはロータリアンの重大関心事でなければならない」と言って、世界社会奉仕プログラムを正式に発足しました。

●まさに、世界レベルでの社会問題を解決するために、地区／クラブが団体として奉仕の実践主体に躍り出たのです。



## ポリオ・プラス・プログラムの登場

### ロータリー財団プログラムの進化とRI主導

- 1965年 GSE、特別補助金プログラム
- 1978年 3Hプログラム(保健・飢餓追放・人間性尊重)
  - \* 創立75周年を記念し開始。
  - \* 初の3H補助金: フィリピンで630万人の子供たちにポリオの予防接種。
- 1985年 ポリオ・プラス・プログラム  
(ハシカ・ジフテリア・結核・百日咳・破傷風)

#### <We Serve の更なる変質>

これはロータリー全体のプログラムであり、RI事務局が、世界の全クラブの参加を呼び掛けつつ、中央から管理したという点で、WCSとは異なっていた(奉仕の1世紀P165)

●戦後、1960年代から80年代にかけてが、国際ロータリーが最も生き生きと活動した時期です。

●それは、1956年40万人であった会員数が、10年毎に20万人ずつ増え続け、1986年に100万人を突破し、1996年には120万人に達したことから裏付けることができます。

●世界社会奉仕プログラムの他にも、青少年育成に関するプログラムが考えられます。1959-60年度のヘラルド・トーマスRI会長「青少年奉仕開発のための5人委員会」設置を契機として、1962年IAC、1968年RAC、1971年RYLA、1972年青少年交換プログラムが次々と公式プログラムとして採用されます。

●また、1965年 研究グループ交換(GSE)、特別補助金(後の M.G.)プログラムが、ロータリー財団プログラムとして、先行した1947年からの国際親善奨学金プログラム(当時の高等教育のためのロータリー財団奨学金制度)に加わられます。そして、現在継続中の「END・POLIO・NOW」ポリオ撲滅運動の端緒である、1978年の3Hプログラムへ、更には、1985年のポリオ・プラス・プログラムへと進化して行きます。

3Hプログラムは、RI理事会が創立75周年を記念して、その前々年度の1977-78年に開発されたもので、その目的は、国際間の理解、親善、および平和を促進するための方法として、人々の健康状態を改善し、飢餓を救済し、人間性を尊重する事業を展開することでした。

ロータリー財団プログラムの移り変わりや、世界社会奉仕とロータリー財団との歴史的関係については時間の関係で省略させていただきますが、ここで強調したいことは、世界社会奉仕活動に見られるように、クラブ/地区対クラブ/地区の奉仕活動、つまり団体による奉仕活動として奨励され、展開されたということです。

と同時に、これらのプログラムによるクラブ主導の奉仕活動は、世界レベルでの社会問題を解決するためにという、もはや、地域社会を超えた国際的なロータリーの使命が強調されることを意味します。

1991年、個人と団体による奉仕活動を強調・提唱する「国際ロータリーの使命」がRI理事会で決議されます。

こうした国際的な場での奉仕活動、特に人道的奉仕活動の強調は、主に、地域社会で活動する、その地で期待されていた職業人としてのロータリアンのと責任感と存在感を、往々にして希薄化する方向へ働きます。

そしてもう一つここで指摘したいことは、「ポリオ・プラスはロータリー全体のプログラムとして、RI事務局が、世界の全クラブの参加を呼び掛けつつ、中央から管理したもので、RIが主導したものという意味で、世界社会奉仕活動とも異なる」ということです(奉仕の一世紀 p 165)。

この時期、中央からの管理の正否は別にして「We serve」のWeの内容すらもクラブからRI主導へと変化していきます。正に人道的奉仕活動がロータリーの奉仕活動の主流となり、クラブ主導からRI主導へとロータリー財団プログラムを媒介として、奉仕の主役が変わっていきます。

## 職業奉仕に関する声明

(2010年手続要覧p109 2013年削除・ロータリー章典8.030.1 2013.1.mtg修正)

### ・職業奉仕は、ロータリー・クラブとクラブ会員両方の責務である。

**クラブの役割**は、模範となる実例を示すことによって、また、クラブ会員が自己の職業上の手腕を発揮できるようなプロジェクトを開発することによって、目標を实践、奨励することである。**クラブ会員の役割**は、ロータリーの原則に沿って、自らと自分の職業を律し、併せてクラブ・プロジェクトに応えることである。(in accordance with Rotary principles)

・標準ロータリークラブ定款 第5条 五大奉仕部門 第2奉仕の第二部門である職業奉仕は、……………。**会員の役割**には、ロータリーの理念に従って自分自身を律し、事業を行うことが含まれる。

●1987年に40年ぶりに復活したRI職業奉仕委員会が「職業奉仕に関する声明」を発表します。その中に「職業奉仕は、ロータリークラブとクラブ会員両方の責務 (responsibility)である」そして、クラブの役割 (role) は云々…クラブ会員の役割は云々…とあります。

●誤解を恐れずに申しあげますが、私がガバナーの時、地区に職業奉仕委員会は置きませんでした。代わりに職業奉仕を担当する委員会として「会員基盤強化委員会」という名称の委員会を置きました。

●私は、基本的に、職業奉仕は会員個人の問題

であり、クラブに職業奉仕委員会があれば、地区に屋上屋を重ねるような委員会は必要ないと考えました。問題はこの「職業奉仕に関する声明」の真意を理解することです。

●人道的奉仕活動、しかもクラブによる人道的奉仕活動が主流である時期に、ロータリーのアイデンティティー(独自性・個性)、特徴である「ロータリーは職業人の集まりであり、ロータリアンは地域の職業を代表するものである」という意識をクラブ内で強調、喚起するための逆説的方法として考えたものでした。会員としての責務とクラブの責務をはっきり区別すること、これが大切と考えました。

●この職業宣言を、何となく読んでしまうと、この区別が明確になりません。じっくり何回か読むと、まず、職業奉仕の実践主体はロータリアンであって、クラブではないことが読み取れます。クラブ職業奉仕委員会の活動対象は、会員であるロータリアンであり、地域社会ではないことが読み取れます。

●クラブの役割は、会員に対して、模範となる実例を示したり、会員の職業上の手腕を発揮できるようなプロジェクトを企画することです。

例えば最近、企業と職業奉仕との関連で企業の社会的責任が話題になっていますが、これもクラブは会員個人に対し、自然や社会の環境保全に対しての意識を啓発する様々な方法を考えることであって、クラブが会員の企業や地域の企業に対して、環境問題に配慮しなければならぬとして働きかける活動は、クラブの社会奉仕活動の枠組みに入ることなのです。

●会員の役割は、自らと自らの職業を律すること、これこそが職業奉仕そのものです。

標準クラブ定款第5条五大奉仕部門第2項にも同じことが書かれています。「The role of members includes conducting themselves and their businesses in accordance with Rotary's principles 会員の役割には、ロータリーの理念に従って自分自身を律し、事業を行うことが含まれる」と。

しかし、ここにはクラブの役割が書かれておりません。会員の役割だけ上記に「含まれる」と書かれております。RI定款第4条の前段部分は、ロータリーの目的の第2と同じような表現になっていますが、この前段があたかも会員とクラブ双方の役割であるかのようになっております。

ロータリーの目的は、クラブと会員双方に宛てたもののでしょうか。私は会員に対するものと考えています。

ロータリーの目的と同じような文章を前段に表現し、最後に、敢えてクラブの役割は書かずに、会員の役割のみ加えている表現は、クラブと会員の役割を曖昧にしています。会員とクラブの役割ははっきり区別されなければなりません。何もクラブが職業奉仕の実践主体になるような必要はないのです。職業奉仕活動は個人に帰属した固有の活動です。時として、団体で行うクラブの人道的奉仕活動とはっきり区別しなければなりません。

制定採択案 01-148

**職業分類を保持しつつ、クラブ会員の種類を正会員と名誉会員に簡素化する件**

**1. 一業種一人という職業分類の原則の変更**

1) 2001年までは正会員は職業分類を代表する者

(例外)①報道機関 ②宗教 ③外交官 ④アディショナル正会員

2) 会員種類は正会員を含め3種類

①シニア・アクティブ会員 ②パスト・サービス会員 ③名誉会員

**2. 第2節 クラブ構成**

(a) クラブは善良な成人であって、職業上良い世評を受けている正会員によって構成されるものとする。

(i) 一般に認められた有益な事業または専門職務の持主、共同経営者(パートナー)、法人役員または支配人であるか;または

(ii) 一般に認められた有益な事業または専門職務あるいはその地方代理店または支店において、裁量の権限ある管理職の重要な地位にあること;

(iii) 本サブセッションの...いかなる地位からも退職していること

●さて、今までロータリー奉仕の世界が、職業奉仕を除いて、I serve から We serve へ変わり、しかも We も変わってきているということ話しました。そして、現時点で、奉仕の世界が決定的に変わってしまったことを話さなくてはなりません。それは I serve の「I」そのものが変わってしまったことです。

冒頭でお話ししましたR I 戦略による「会員の再編成」です。

2001年規定審議会にR I 理事会から提出された制定案01-148の採択によって、職業奉仕に関する極めて重要な事柄が変更されました。

本日配布しました小冊子の10ページが、採択制定案01-148の内容です。下線部分が追加部分で、取消線は削除部分です。

●この採択制定案は「職業分類を保持しつつ、クラブ会員の種類を正会員と名誉会員に簡素化する件」との表題ですが、現実には、一業種一人というロータリーの職業分類の原則を変更することになり、結果的に簡素化するどころか、正会員となるための資格と会員種類を広める契機となりました。

●一業種一人という原則は、2001年までは正会員は職業分類を代表するものとして、例外を除き、厳格に守られていました。つまり、報道機関、宗教、外交官の職業分類および細則に定められているアディショナル正会員を除き、同じ職業分類の会員は一クラブに一業種一人だけでした。

●一クラブ5人までの同じ職業分類を認めたことは、「職業分類を保持しつつ」と言っていますが、一業種一人の正会員という職業分類の原則がこの時点で消滅したと言ってもいいでしょう。

更に、2001年までは、R I 細則で定められていた会員種類は正会員を含め、シニア・アクティブ会員、パスト・サービス会員、名誉会員の4種類でありましたが、正会員以外は職業分類を代表しないということでした。正会員と名誉会員の2種類にする「簡素化」は、会員種類を4種類から2種類にただけの量的問題であり、何ら実質的な意味を持っていません。

●それまでは(スライドにあるように)R I 定款第5条第2節クラブ構成は、(a)の(i)・(ii) だけであり、「有益な事業または専門職務の持主云々」がキーワードでした。2001年の規定に追加された(iii)の退職者は、シニアアクティブ会員とパスト・サービス会員を削除したことを補う意味で、新設されたものです。

●シニアアクティブ会員とパスト・サービス会員をなくし、一般に正会員を5人まで認め、名誉会員と2種類の会員種類に省略化したことが、大変重要な結果をもたらすことになりました。それは、職業分類制度が地域社会の職業を代表することを意味し、その担い手に「職業奉仕」を自ら実践するという責任感を醸成するものであったものが、職業分類制度の形骸化により、責任感まで希薄化してしまう結果になったということです。

新会員に対し、よほど継続的にきちっとした研修をしない限り、自らの職業分類に課せられた責任の意味を知り、「職業上の高い倫理基準を保ち、全ての有益な仕事は価値あるものと認識し、更にロータリアン各自が奉仕活動を通じ自らの職業を高潔なものにしよう」という意識を持つことが会員から徐々になくなって行くでしょう。

●余談になりますが、R I 定款第5条の会員に関しては、調べた限りでは、1968年6月のメキシコシティ国際大会の制定案68-42で「新聞業及び宗教分類を除き、3人より多くの正会員であってはならない」とする改正案が出ています。アディショナル正会員の変遷を含め、一業種一人という職業分類の原則に対して、相当以前から問題提起がなされていたことは歴史的事実です。時間の関係で、会員資格の歴史については省略致します。

### 13-43 仕事をすることがない人または仕事を中断している人を正会員として認める件

◎国際ロータリー定款を次のように改正する (手続要覧p179)

(決定報告書p11)

#### 第5条 会員 第2節-クラブの構成

(a)クラブは、善良な成人であり、職業上および(または)地域社会で良い評判を受けている以下のような正会員によって構成されるものとする。

- (1)一般に認められた有益な事業や専門職務の所有者、共同経営者(パートナー)、法人役員、支配人のいずれかであること。または、
- (2)一般に認められた有益な事業や専門職務あるいはその地方代理店や支店において、裁量の権限ある管理職を務め重要な地位にあること。または、
- (3)本節(a)の上記(1)または(2)に掲げたいずれかの地位から退職していること。
- (4)地域社会の活動に自ら参加することによって、奉仕およびロータリーの綱領への献身を示した地域社会のリーダーであること。または、
- (5)理事会によって定義されているロータリー財団学友であること。または、
- (6)子どもの世話または配偶者の仕事の手伝いのために仕事を中断した人、または同じ理由のために仕事をすることがない人であること。

注) 原案は配偶者ではなく夫であった。性の問題で配偶者に修正された

●2013年規定審議会で制定案13-43が採択されたことによって、ロータリーにおける職業奉仕の世界が決定的に狭まることとなります。職業人でない人も、ロータリークラブの正会員になれることになったからです。

2001年までは、ロータリーの基本的な構成要素である正会員の資格は「事業および専門職務に携わる人」所謂職業人でした。2007年の規定審議会で、スライドの(4)(5)の地域社会のリーダーとロータリー財団学友が正会員の資格を得ました。

皆さん既にご存じのように、現時点で、子どもの世話または仕事の手伝いのために「仕事を中断した人」「仕事をすることがない人」が正会員の資格を得ることができるようになりました。会員選考はクラブの自主性に委ねられているとはいえ、現実には、既に主婦(夫)が会員となっているクラブや、ロータリアンが夫婦で正会員となっているクラブが多数見受けられます。

先日、私の友人がブラジルへ世界大会の下見に行ったついでに、日系ブラジル人によって構成されるクラブを訪問したところ、そのクラブは24人のクラブで6組が夫婦の会員、つまり半数は夫婦の会員で構成されていたそうです。

クラブに所謂職業人でない人が正会員でいる場合、クラブによる職業奉仕事業はその会員を対象としたものでなくなりますし、その会員はロータリーでいう職業奉仕活動はできません。

五大奉仕部門は、クラブの活動のための哲学的(理念的)および実際的(実践的)な規準(枠組み)です。職業奉仕部門に関しては、クラブ活動に統一性がなくなるとおもいますが、如何でしょう。

正会員イコール職業人という、長い間受け継がれてきたロータリーの遺伝子はこれからは、重要な遺伝子ではなくなるのでしょうか。職業人を前提としている今のロータリーの目的も変更する必要がでてくるかも知れません。五大奉仕部門も、手続要覧の推奨クラブ細則から削除されております。冒頭にお話ししましたが、奉仕部門、特に職業奉仕がクラブ奉仕、国際奉仕と共に極力省略化されています。五大奉仕部門という枠組みもゆくゆくはなくなるかもしれません。

ロータリーは今、大変な転換期にあります。ロータリーの哲学は行動哲学です。ロータリアン一人ひとりが考え、行動しなければならぬ大切な時期(とき)です。変わることを前提としたRI理事会の決定を、無批判にことごとく受け入れるとすれば、私はロータリーの将来はないのではと危惧しております。

「Leaders are like Eagles. They don't flock. You find them one at a time.」

ご静聴ありがとうございました。